

現代文問題集⑤

【高校初級篇・第二】

湊日莊

目次

【第一問】 「わかりやすさ」の向こう側	… 2ページ
【第二問】 問いはどこから始まるのか	… 10ページ
【第三問】 動かない大地を、どう疑うか	… 18ページ
【第四問】 安定としての結合——イオン結合と共有結合の違いから考える	… 27ページ
【第五問】 縄文という時間——「進歩」の外側で生きるということ	… 35ページ
おわりに	… 44ページ

【第一問】「わかりやすさ」の向こう側

「わかりやすい説明ですね」と言われて、不快に思う人はあまりいないだろう。むしろ、ほめ言葉として受け取られることが多い。授業でも、解説動画でも、説明書でも、「わかりやすさ」は重要な価値として扱われている。内容が難しくても、かみくだいて説明してくれるものは歓迎され、そうでないものは敬遠されがちだ。私たちはいつの間にか、「わかりやすい＝よいもの」という感覚を、ほとんど疑うことなく共有している。

確かに、わかりやすさは多くの場面で助けになる。初めて触れる内容や、基礎を学ぶ段階では、整理された説明が理解を支えてくれる。専門用語を減らし、図や例を用いて説明することで、全体像をつかみやすくなることも多い。もし世の中の説明がすべて難解で断片的なものだったら、多くの人は学ぶこと自体に挫折してしまうだろう。この点で、わかりやすさは確かに価値ある工夫である。

しかし一方で、「わかりやすい説明」を受け取ったとき、私たちは本当にその内容を理解しているのだろうか。たとえば、動画で手順を見ただけで料理ができるようになった気がしたり、短い解説を読んだだけで、ある問題について「もう分かった」と感じたりすることがある。実際には自分で手を動かしたり、考え直したりしていないにもかかわらず、理解したつもりになってしまう。わかりやすさは、ときに「分かった気分」を先に与えてしまうのだ。

この「分かった気分」は、必ずしも本当の理解と一致しない。説明が整理されているほど、聞き手は内容を追いやすくなり、途中で立ち止まる必要がなくなる。だが、理解とは本来、引っかけりや疑問を含むものではないだろうか。言い換えれば、分からない部分がどこにあるかを意識することこそが、理解の出発点である。にもかかわらず、説明があまりに親切だと、そうした引っかけりが表に出てこないまま、話が終わってしまうことがある。

学校の授業でも、似た場面は少なくない。黒板に整然とまとめられた要点を書き

写し、例題の解き方をなぞること、「理解した」という感覚を持つ生徒は多い。しかし、いざ少し形を変えた問題に向き合おうと、手が止まってしまうことがある。これは、内容を覚えたことと、自分の頭で理解したことが必ずしも同じではないことを示している。わかりやすい説明は、考える負担を軽くするが、その分、考える機会を減らしてしまう可能性もある。

もちろん、だからといって「わかりやすさは悪い」と言いたいわけではない。問題は、わかりやすさが目的そのものになってしまふことだ。説明する側が「伝えた」ことで満足し、聞く側が「分かったつもり」になると、理解はその場で止まってしまう。本来、説明とは考えるための入口であるはずなのに、出口のように扱われてしまうと、そこから先に進めなくなる。

もう一つ注意すべきなのは、「わかりやすさ」が人によって異なるという点である。ある人にとって分かりやすい説明が、別の人にとっては物足りなかったり、逆に誤解を生んだりすることもある。背景知識や経験が違えば、必要な説明の深さも変わる。それにもかかわらず、ひとつの「わかりやすさ」をすべての人に当てはめようとする、どうしても内容は平均化され、細かな違いや複雑さが切り落とされてしまう。

こうして考えると、わかりやすさとは便利であると同時に、注意深く扱うべき性質を持っていると言える。わかりやすい説明は、理解への近道になりうるが、同時に「もう考えなくてよい」という錯覚を生むこともある。本当に理解するためには、説明を受け取ったあとに、自分なりに問い直したり、言い換えたり、別の場面で使ってみたりする作業が欠かせない。

わかりやすさは、理解の完成形ではない。それは、考え始めるための足場にすぎない。説明がわかりやすかったかどうかよりも、その説明をきっかけに自分がどれだけ考え続けられたか。その点に目を向けることが、これからの学びにおいてはますます重要になっていくだろう。

設問

問一

本文中の「分かった気分」(第三段落)とは、どのような状態を指しているか。その説明として**最も適切なもの**を、次のア～エの中から一つ選べ。

ア 説明が丁寧であるため、内容の細部まで正確に記憶できている状態。

イ 自分で考えたり試したりしていないにもかかわらず、理解したように感じてしまっている状態。

ウ 説明を受ける前よりも疑問点が増え、内容を再検討しようとしている状態。

エ 専門的な説明を聞いたことで、内容の難しさを強く自覚している状態。

問二

第四段落で述べられている学校の授業の例は、本文全体の議論においてどのような役割を果たしているか。**最も適切なもの**を次のア～エから選べ。

ア わかりやすい説明があれば、どのような問題にも対応できることを示すため。

イ 説明の分かりやすさと、実際の理解との間にずれが生じることを具体的に示すため。

ウ 学校教育における指導方法の改善点を提案するため。

エ 生徒の学習意欲が低下している原因を分析するため。

問三

筆者は「わかりやすさ」について、どのような立場を取っていると考えられるか。本文の内容を踏まえ、**最も適切なもの**を次のア～エから選べ。

ア わかりやすさは誤解を生みやすいため、できるだけ避けるべきである。

イ わかりやすさは理解を深めるための唯一の条件である。

ウ わかりやすさには価値があるが、それだけで理解が完結するわけではない。

エ わかりやすさは人によって異なるため、説明では考慮する必要がない。

問四

本文で述べられている「わかりやすさが目的そのものになってしまう」とは、どのような問題を指しているか。本文の内容に即して、50～70字程度で説明せよ。

問五

本文の主張を最も的確にまとめたものとして適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア わかりやすい説明は、人の理解を妨げるため、学習の場では控えるべきである。
イ 説明は複雑であるほど、考える力を育てることができる。

ウ わかりやすさは理解への入口にはなるが、その後を考え続ける姿勢が不可欠である。

エ 理解とは、説明を受けた内容を正確に覚えることで達成される。

問六

本文の内容を踏まえ、「これからの学び」において重要だと筆者が考えている点を、60字程度でまとめよ。

解答・解説

【全体総括】

この文章は、「わかりやすさ」という一見すると無条件に肯定されがちな価値について、その利点を認めつつも、そこに潜む危うさを丁寧に掘り下げた論説である。筆者は、わかりやすい説明が理解を助ける場面を否定しない一方で、それが「分かったつもり」を生み、考える機会を奪ってしまう可能性を指摘する。本文全体は、具体例と一般論とを往復しながら、「理解とは何か」「学びとはどのような営みか」を問い直す構造になっている。各設問では、語句の意味把握にとどまらず、具体例の役割や筆者の立場、文章全体の主張を整理する力が求められている。

問一

解答…イ

解説

本文では、「分かった気分」とは、実際には自分で考えたり試したりしていないにもかかわらず、説明が整理されていることで理解したように錯覚してしまう状態を指している。第三段落の内容に最も合致するのはイである。

自己採点チェックリスト

- ・ 「実際の理解」と「感じている理解」のずれに着目できているか
- ・ 第三段落の具体的な説明内容を根拠に判断しているか
- ・ 「錯覚」「思い込み」に近い状態であることを捉えているか

問二

模範解答…イ

解説

学校の授業の例は、説明が分かりやすく整理されていても、それが必ずしも自分の理解につながるとは限らないことを示す具体例として用いられている。全体の主張

を補強する役割を果たしているため、イが適切である。

自己採点チェックリスト

- ・ 具体例と筆者の主張との関係を意識できているか
- ・ 「授業批判」ではなく「理解のずれ」を示す例だと捉えているか
- ・ 本文全体の議論とのつながりを踏まえて判断しているか

問三

模範解答…ウ

解説

筆者は、わかりやすさの価値を認めつつも、それだけで理解が完結するわけではないという立場を取っている。全面否定でも全面肯定でもない点が重要であり、ウが最も適切である。

自己採点チェックリスト

- ・ 筆者の立場が「二項対立」でないことを捉えられているか
- ・ わかりやすさの利点と限界の両方に触れているか
- ・ 極端な主張を選んでいないか

問四 (50～70字)

模範解答

わかりやすく伝えること自体が目的化し、説明する側は伝えたことで満足し、受け手は分かったつもりになって思考が止まってしまう状態を指している。

別解例①

説明が分かりやすかったかどうかだけが重視され、その説明をもとに考え続けるという本来の学びの過程が失われてしまうこと。

別解例②

わかりやすさがゴールになり、説明後に問い直したり考え直したりする機会が奪わ

れてしまう問題を指している。

自己採点チェックリスト

- ・ 「目的化」という表現の意味を具体的に説明できているか
- ・ 説明する側と受け取る側の両方に触れているか
- ・ 思考が止まる点を明確に示しているか

問五

模範解答…ウ

解説

本文全体を通して、筆者は「わかりやすさは理解への入口にすぎず、その後を考える続けることが重要である」という主張を展開している。これを最も的確にまとめているのがウである。

自己採点チェックリスト

- ・ 文章全体を一文で捉え直せているか
- ・ 否定でも賛美でもない中間的立場を選んでいるか
- ・ 結論段落の内容を反映できているか

問六（90字程度）

模範解答

筆者は、説明の分かりやすさに満足するのではなく、その説明をきっかけとして自分なりに問い直し、別の場面で使ってみるなど、考え続ける姿勢こそが学びにおいて重要だと考えている。

別解例①

筆者は、わかりやすい説明を受けて理解したつもりになることを戒め、説明後に関容を問い直したり、他の場面で試したりすることで、自分自身の思考を深め続ける姿勢が学びに不可欠だと述べている。

別解例②

筆者は、説明の分かりやすさを理解の到達点とせず、それを出発点として自ら考え直し、応用し続ける過程にこそ学びの本質があり、その姿勢が今後ますます重要になると考えている。

自己採点チェックリスト

- 「これからの学び」という視点を明確にしているか
- 説明後の行動（問い直す・使うなど）に触れているか
- 筆者の価値判断を本文に即してまとめているか

【第二問】問いはどこから始まるのか

私たちは日常の中で、何かを学ぶとき「答え」を先に求めがちである。テスト勉強では正解を覚え、調べものをするときには検索結果の上位にある説明を読む。そこに書かれていることが納得できれば、「分かった」と感じ、次へ進む。効率よく知識を得るという点では、こうした姿勢は合理的に見える。

しかし、答えを得ることと、考えることは必ずしも同じではない。答えは、誰かがすでにまとめた結果であり、そこに至る過程は省略されていることが多い。私たちは、その結果だけを受け取ることで、短時間で「知っている状態」になることができる。一方で、その答えがなぜ必要とされたのか、どのような問いから導かれたのかを意識しないままでは、理解は表面にとどまりやすい。

たとえば、授業中に先生が「ここは大事だから覚えてください」と言ったとする。多くの生徒は、その言葉を手がかりに、内容を暗記しようとするだろう。だが、「なぜそれが大事なのか」「どんな場面で使われるのか」という問いを持たないまま覚えて知識は、状況が少し変わると役に立たなくなることがある。答えは持っていない、それを使うための視点が育っていないからである。

このような学びでは、「問い」が学習の中心に置かれていない。問いは、自分が引っかかったところや、納得できなかった点から生まれるものだ。しかし、答えが先に示されると、そうした引っかかりは表に出にくくなる。すでに正解が示されている状況では、「なぜだろう」と立ち止まる必要がなくなってしまうからである。一方で、問いから始まる学びも存在する。たとえば、問題を解いていて手が止まったとき、「どこが分からないのか」「何が足りないのか」を考える経験は、多くの人に覚えがあるだろう。そのとき生まれる問いは、自分の理解の限界を示すものであり、次に何を学ぶべきかを教えてくれる。ここでは、問いが学びを前に進める力として働いている。

問いを持つ学びは、時間がかかる。すぐに答えが見つからないことも多いし、調

べてもはつきりしない場合もある。それでも、自分の中に残った違和感や疑問は、思考を続けるきっかけになる。問いがあるからこそ、人は同じ内容を別の角度から見直し、理解を深めていくことができる。

もちろん、すべての学びを問いから始める必要があるわけではない。基礎的な知識を身につける段階では、答えを受け取ることが有効な場面も多い。ただ、その答えが「終わり」になってしまうと、学びはそこで止まってしまう。答えを受け取ったあとに、「これはどんな問いに対する答えなのか」と考え直すことで、学びは再び動き始める。

わかりやすい説明は学びの入口として重要である。しかし、入口に立ったままでは、学びは広がらない。問いは、その先へ進むための道しるべであり、自分自身の理解を確かめるための手がかりでもある。答えを覚えることと、問いをもち続けること。この二つの間を行き来する中で、学びは少しずつ自分のものになっていく。

問いは、特別な才能がなければ生まれないものではない。むしろ、分かなさや違和感に正直であることから始まる。答えを急ぐ前に、立ち止まって問いを確かめる。その姿勢が、学びを深めるための確かな一歩になるのではないだろうか。

設問

問一

本文において、「答えを得ること」と「考えること」はどのように区別されているか。その説明として**最も適切なもの**を、次のア～エから一つ選べ。

ア 答えを得ることは時間がかかるが、考えることは短時間でできる。

イ 答えを得ることは結果を受け取る行為であり、考えることはそこに至る過程をたどる行為である。

ウ 答えを得ることは個人の努力に依存し、考えることは他者の説明に依存する。

エ 答えを得ることも考えることも、本質的には同じ学習行為である。

問二

第三段落で述べられている授業の例は、本文全体の議論においてどのような役割を果たしているか。**最も適切なもの**を、次のア～エから選べ。

ア 学校教育の問題点を批判するための具体例として用いられている。

イ 答えを覚える学びが、状況の変化に対応しにくいことを示すための例として用いられている。

ウ 暗記中心の学習が必ず成果につながることを示すための例である。

エ 教師の説明方法によって学習効果が左右されることを示すための例である。

問三

本文において、筆者は「問い」をどのようなものとして捉えていると考えられるか。**最も適切なもの**を、次のア～エから選べ。

ア 答えを確認するために、学習の最後に立てるもの。

イ 他人から与えられることで、学習を効率化するもの。

ウ 自分の理解の限界や違和感から生まれ、学びを前に進めるもの。

エ 専門的な知識がなければ立てることができないもの。

問四

本文で述べられている「問いが学びを前に進める」とは、どのような意味か。本文の内容に即して、**80字程度**で説明せよ。

問五

本文の主張として最も適切なものを、次のア～エから一つ選べ。

ア 学びにおいては、まず問いを立て、それから答えを探すことだけが重要である。

イ 答えを覚える学びは無意味であり、すべて問いから始めるべきである。

ウ 答えを受け取る学びと、問いを持ち続ける学びを行き来することが、理解を深める。

エ 問いを持つ学びは時間がかかるため、効率の面で現実的ではない。

問六

本文を踏まえ、筆者が考える「学びが自分のものになる過程」とはどのようなものか。**80字程度**でまとめよ。

解答・解説

【全体総括】

この文章は、学びにおいて「答えを得ること」と「考えること」を区別しながら、問いが果たす役割を静かに掘り下げた論説である。筆者は、効率的に答えを受け取る学びの利点を認めつつも、それだけでは理解が表面的にとどまりやすいことを指摘する。そして、分からなさや違和感から生まれる問いこそが、学びを前に進め、自分の理解を深める原動力になると論じている。本文全体は、具体例と一般論を行き来しながら、学びが「自分のもの」になる過程を考えさせる構成になっている。

問一

解答…イ

解説

本文では、答えを得ることは「誰かがまとめた結果を受け取る行為」であり、考えることは「そこに至る過程をたどる行為」として区別されている。この説明に最も合致するのがイである。

自己採点チェックリスト

- ・ 「結果」と「過程」の対比を意識できているか
- ・ 本文の定義に即して選択しているか
- ・ 効率や時間の話にすり替えていないか

問二

解答…イ

解説

授業の例は、答えを覚える学びが、状況が少し変わっただけで対応できなくなることを示す具体例として用いられている。本文全体の主張を支える役割を果たしているため、イが適切である。

自己採点チェックリスト

- ・ 具体例の役割を「批判」ではなく「説明」として捉えているか
- ・ 本文の主張と例の関係を整理できているか
- ・ 学校教育全体への評価と混同していないか

問三

解答…ウ

解説

本文では、問いは「自分の理解の限界や違和感から生まれ、学びを前に進めるもの」として捉えられている。この点を最も的確に表しているのがウである。

自己採点チェックリスト

- ・ 問いの「出どころ」に着目できているか
- ・ 他者から与えられるものと誤解していないか
- ・ 問いの役割を学びの推進力として捉えているか

問四

模範解答

問いがあることで、自分の分からない点が明確になり、何を学ぶべきかが見え、理解を深める方向へ学びが進んでいくという意味である。

別解例①

問いは理解の不足を示す手がかりとなり、学びを立ち止まらせるのではなく、次の思考や学習へ導く役割を果たすという意味である。

別解例②

問いが生まれることで、学びは答えで終わらず、考え直しや見直しを通して前に進むものになるということを表している。

自己採点チェックリスト

- ・ 問いが「学びの原動力」である点を説明できているか
- ・ 単に「疑問がある」という説明で終わっていないか
- ・ 本文の表現を踏まえた言い換えになっているか

問五

解答…ウ

解説

本文では、答えを受け取る学びと問いを持続ける学びを対立させるのではなく、その両方を行き来することが理解を深めると述べられている。この主張を最も確にまとめているのがウである。

自己採点チェックリスト

- ・ 極端な主張を選んでいないか
- ・ 本文終盤のまとめと一致しているか
- ・ 筆者の立場をバランスよく捉えているか

問六

模範解答

筆者は、答えを受け取って終わるのではなく、そこから生まれる問いを通して理解の不足を確かめ、考え直しながら学びを進めていく過程こそが、学びを自分のものにすると考えている。

別解例①

筆者は、答えを覚える学びにとどまらず、その答えがどんな問いから生まれたのかを考え直すことで、理解を深め、学びを自分自身の思考として積み重ねていく過程が重要だと述べている。

別解例②

筆者は、問いを持ち続けながら答えを見直し、別の場面で考え直すことによって、

知識が単なる情報ではなく、自分の理解として定着していくと考えている。

自己採点チェックリスト

- 「過程」に焦点を当てて説明できているか
- 問いと答えの関係を整理できているか
- 「自分のものになる」という表現の意味を言い換えられているか

【第三問】動かない大地を、どう疑うか

私たちはふだん、地面が動いているとは思えない。足元の大地は安定したものとして感じられ、山や海の位置も、長い時間を通じてほとんど変わらないものだと思いが込んでいる。歩くときも、建物を建てるときも、地面は「そこにあるもの」として前提にされ、疑われることはない。こうした感覚は、日常生活においてはきわめて自然であり、むしろ疑わないことによって私たちは安心して暮らしていると言えるだろう。

しかし、科学の世界では、この「動かないはずの大地」が、実はごくゆっくりと動いているのではないか、という考え方が現れた。現在では、地球の表面がいくつかのプレートと呼ばれる板状の部分に分かれ、それらが時間をかけて移動しているという理論が広く受け入れられている。これをプレートテクトニクスという。この理論は、大陸の配置だけでなく、地震や火山の分布、山脈の形成など、さまざまな現象を説明する枠組みとなっている。

だが、この考え方は、最初から当然のものとして受け入れられたわけではなかった。大陸が動くという発想そのものは、二十世紀の初めにはすでに提案されていたにもかかわらず、長いあいだ、主流の考え方とはならなかったのである。当時の研究者たちも、大陸の形が互いに似ていることや、遠く離れた地域で同じような化石や地層が見つかることには気づいていた。観測事実そのものは、決して少なくなかった。

それでも、大陸移動の考えが広く認められなかった理由の一つは、「どのようにして大陸が動くのか」という仕組みを説明できなかった点にある。大陸は巨大で重く、硬い岩盤でできている。そのようなものが、海の底を押し分けて移動するという考えは、多くの人にとって現実味のないものに感じられた。事実がいくつかそろっていても、それを成り立たせる仕組みが想像できなければ、理論として受け入れられにくいのである。

ここには、科学的理解の一つの特徴が表れている。科学は、単に観測された事実を並べるだけでは成立しない。それらを結びつけ、意味づける枠組みが必要になる。どれほど正確な事実であっても、それを支える考え方が共有されていなければ、理解には至らない。大陸移動説が長く支持されなかった背景には、当時の科学者たちが共有していた「大地は基本的に動かない」という前提があったと言える。

やがて、海底の調査が進み、状況は少しずつ変わっていく。海底に広がる地形や磁気の分布が詳しく調べられるようになると、地球表面が一枚岩ではなく、複数の部分に分かれている可能性が浮かび上がってきた。ここで重要だったのは、大陸そのものが単独で動くのではなく、地球表面全体を覆うプレートが動き、その上に大陸が乗っていると考える発想である。

この見方に立つと、それまで説明が難しかった現象が、一つのまとまりとして理解できるようになった。同じ観測事実であっても、どの枠組みで捉えるかによって、その意味は大きく変わる。プレートテクトニクスは、新しい事実を大量に追加したというよりも、既に知られていた事実を結び直す役割を果たした理論だったとも言える。

この過程を振り返ると、理解が遅れた理由は、単なる情報不足ではなかったことが分かる。必要だったのは、事実を受け取る側の視点の変化であり、当たり前だと思われていた前提を問い直す姿勢だった。動いていないように見えるもののほど、その背後にある変化を想像することは難しい。だからこそ、疑うためには勇氣と時間が必要になる。

プレートテクトニクスの成立は、科学における理解が、直線的に進むものではないことを示している。事実が先にあり、理解があとから追いつく場合もあれば、考え方の転換が先にあって、事実の意味が変わる場合もある。理解とは、新しい情報を知ることだけではなく、世界の見方を組み替える営みでもある。

動かないと思われていた大地を疑ったとき、地球の姿はまったく異なるものとして立ち現れた。同じ場所に立っていても、どのような前提で世界を見るかによって、

見える景色は変わる。プレートテクトニクスの歴史は、そのことを静かに示しているのである。

設問

問一

本文によれば、大陸移動の考えが長いあいだ広く受け入れられなかった理由として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア 大陸がどのような仕組みで動くのかを説明する枠組みが共有されていなかったから。

イ 大陸の形や化石の一致といった観測事実が、当時はほとんど知られていなかったから。

ウ 大陸が動くという考えが、宗教的・思想的理由から否定されていたから。

エ 海底の調査技術が未発達であったため、理論の検証が不可能だったから。

問二

本文中で述べられている「科学的理解」の進み方についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア 新しい事実が大量に発見されることで、従来の理論は自然に更新されていく。

イ 正確な観測事実がそろえば、それをもとにした理論は速やかに受け入れられる。

ウ 事実そのものよりも、それらを結びつける見方や前提の共有が理解に影響する。

エ 理解は常に段階的に進み、過去の考え方が否定されることはほとんどない。

問三(90字程度)

本文では、科学は事実を集めるだけでは成立しない旨が述べられている。その理由を、本文の内容に即して説明せよ。

問四

本文において、「動いていないように見えるものほど、その背後にある変化を想像することは難しい」という表現が果たしている役割として、最も適切なものを次の

中から一つ選べ。

ア 地球科学の専門的な困難さを具体的に説明するため。

イ 大陸移動説が否定された歴史を感情的に批判するため。

ウ プレートテクトニクスの理論的完成度を強調するため。

エ 人間の認識の傾向を示し、本文全体の議論を一般化するため。

問五（100字程度）

プレートテクトニクスの成立過程を踏まえ、本文で筆者が示している「理解」の特徴についてまとめよ。

問六（100字程度）

本文における「前提を疑うこと」の重要性について、具体的にどのような点が示されているかを説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、プレートテクトニクスという地球科学の理論が受け入れられるまでの過程を手がかりに、「理解」とはどのように成立するのかを考えさせる文章である。本文で重視されているのは、新しい事実の発見そのものよりも、それらの事実をどのような前提や枠組みで捉えるかという点である。大陸移動説が長く支持されなかった背景には、証拠不足ではなく、「大地は動かない」という当たり前とされてきた見方が強く共有されていたことがあった。

筆者は、この歴史を通して、理解が単純な知識の蓄積によって進むのではなく、既存の前提を問い直し、世界の見方を組み替えることで深まっていく営みであることを示している。動いていないように見えるものほど疑いにくいという指摘は、人間の認識の傾向を表すと同時に、科学に限らず広く思考一般に当てはまる問題提起となっている。本章は、理解とは何かを問い直す論説である。

問一

正解…ア

解説

本文では、大陸移動の考えが否定された理由として、観測事実の欠如ではなく、「どのように動くのか」という仕組みを説明できなかった点が強調されている。科学的理解には事実だけでなく、それを結びつける枠組みが必要であることが繰り返し述べられており、これに合致するのはアである。

問二

正解…ウ

解説

本文は、科学的理解が単に新しい事実の蓄積によって進むのではなく、事実をどの

ような前提や見方で整理するかによって左右されることを述べている。事実と枠組みの関係を的確に捉えているのはウである。

問三

模範解答

科学では、観測された事実がいくつか存在していても、それらを意味づける共通の枠組みがなければ理解には至らない。大陸移動説が受け入れられなかったのは、事実ではなく見方が共有されていなかったからである。

別解例①

科学的理解は、事実を並べるだけでは成立せず、それらを結びつける考え方が必要である。大陸移動説の場合も、観測事実があったが、動く仕組みを説明する枠組みがなかったため理解が進まなかった。

自己採点チェックリスト（別解①）

- ・ 「事実」と「枠組み」の区別が明確に書けているか
- ・ 大陸移動説の具体例が理由説明に使われているか
- ・ 因果関係が一文ごとにつながっているか

別解例②

本文では、科学は単なる情報の集積ではなく、事実を整理する視点が重要だとされている。大陸移動説が否定されたのは、証拠不足ではなく、当時共有されていた前提に合わなかったからである。

自己採点チェックリスト（別解②）

- ・ 「証拠不足ではない」という点が明確か
- ・ 前提や視点という語が意味をもって使われているか
- ・ 本文の主張を要約に終わらせず説明できているか

問四

正解…エ

解説

この表現は、大陸移動説の歴史を超えて、人間の認識一般に当てはまる特徴を示す役割を持っている。個別の科学理論ではなく、本文全体の議論を一般化する機能を果たしているため、正解はエである。

問五（記述・100字程度）

模範解答

本文は、プレートテクトニクスの成立を通して、理解とは新しい事実を知ることだけでなく、既存の前提を問い直す過程であると示している。観測事実があっても、見方が共有されなければ理解は進まない。理解とは、世界の捉え方を組み替える営みなのである。

別解例①

筆者は、プレートテクトニクスの歴史を例に、理解が事実の量によって決まるのではないことを示している。重要なのは、事実を結びつける枠組みであり、当たり前とされていた前提を疑うことで、同じ事実の意味が変わる点にある。

自己採点チェックリスト（別解①）

- 「理解」の定義が本文に即しているか
- 具体例と抽象的まとめの両方が含まれているか
- 結論が本文全体の趣旨と一致しているか

別解例②

本文によれば、理解とは単なる知識の追加ではなく、見方の転換を伴うものである。プレートテクトニクスは、新事実の発見よりも、既存の事実を整理し直す枠組みを提供したことで受け入れられた点に、その特徴が表れている。

自己採点チェックリスト（別解②）

- 「知識の追加」と「見方の転換」が対比できているか

- プレートテクトニクスの役割を正確に捉えているか
- 抽象表現が本文内容から浮いていないか

問六

模範解答

本文では、前提を疑うことによって、同じ事実でも異なる意味が見えてくる点が表示されている。大地は動かないという思い込みを問い直したことで、地球の現象が統一的に理解できるようになり、理解が進んだのである。

別解例①

前提を疑う重要性は、動かないと考えられていた大地を再検討した点に表れている。その結果、事実が新たに増えたわけではなく、既存の事実が別の枠組みで結び直され、理解が大きく前進した。

自己採点チェックリスト（別解①）

- 「前提を疑う」行為が具体例で説明できているか
- 理解の変化がどのように起きたか示せているか
- 本文の表現をそのまま写していないか

別解例②

本文は、前提を疑うことで初めて変化が見えることを示している。大地が動かないという常識を外したとき、同じ観測事実が新たな意味を持ち、地球の仕組みが統一的に捉えられるようになった。

自己採点チェックリスト（別解②）

- 常識と前提の関係が明確に書けているか
- 「意味が変わる」理由が説明されているか
- 抽象と具体の対応が取れているか

【第四問】安定としての結合——イオン結合と共有結合の違いから考える

物質がどのように成り立っているかを考えるとき、私たちはしばしば「結びつき」という言葉を用いる。原子と原子が結びつき、分子や物質が形成されるという説明は、高校の化学でも基本的な考え方として扱われている。その中にはいくつかの結合の型があり、代表的なものとしてイオン結合と共有結合が知られている。両者はしばしば並べて説明されるが、その成り立ちや意味合いには大きな違いがある。

イオン結合は、原子同士が電子をやり取りすることで生じる結合である。片方の原子が電子を失い、もう一方の原子がそれを受け取ることで、正の電荷をもつ陽イオンと、負の電荷をもつ陰イオンが生じる。この正と負の電荷の間には静電的な引力が働き、互いを引き寄せる。この引力によって、イオン同士は安定した配置をとることになる。

一方、共有結合では事情が異なる。共有結合は、原子同士が電子を「共有」することで成立する結合であり、どちらか一方が電子を完全に失うことはない。電子は両方の原子の間に存在し、双方がその電子によって安定する。この結合では、原子同士の役割に大きな偏りはなく、比較的对等な関係が保たれていると言える。

この違いを踏まえると、イオン結合の特徴はよりはっきりしてくる。イオン結合は、原子同士が協力して電子を分け合う関係ではなく、性質の異なる原子がそれぞれの状態を変えることで結果的に生じる結合である。電子を失いやすい原子と、電子を引きつけやすい原子という性質の差が、結合の前提条件になっている。そこには、対等さよりも役割の固定が存在している。

ここで重要なのは、どちらの結合も「安定」という状態を目指した結果である点だ。イオン結合であれ共有結合であれ、原子がよりエネルギーの低い、変化しにくい状態に落ち着くことで結合が成立している。「安定する」という表現は、あたかも原子が意志をもって選択しているかのように響くが、実際には外部からの影響を受けにくい状態に移行しているにすぎない。

イオン結合の場合、その安定は電荷の偏りによって支えられている。正と負が引き合うという単純な仕組みが、結合全体を保っているのである。共有結合の場合は、電子を共有することで、どちらの原子にとっても都合のよい電子配置が実現される。どちらも「結びつくこと」自体が目的ではなく、「安定した状態にあること」が結果として結合として現れている。

このように考えると、「結合」という言葉が示しているのは、関係の始まりというよりも、状態の落ち着きであると言える。原子同士がどのように関係しているかよりも、どのような条件のもとでその関係が保たれているかが重要なのである。特にイオン結合は、対等ではない関係が、かえって全体の安定性を高めている点で特徴的である。

さらに注目すべきなのは、こうした結合が私たちの目には見えないという点である。原子も電子も直接観察することはできない。それでも私たちは、物質の性質や反応の仕方、溶けやすさや電気の通しやすさといった結果を手がかりに、その背後にどのような結合が存在しているのかを推測してきた。イオン結合と共有結合の区別も、目に見えない世界を、結果から理解しようとする試みの積み重ねによって形成された概念である。

この点で、イオン結合の理解は、科学的思考の一つの典型を示している。見えないものを前にして、想像や直感に頼るのではなく、観測可能な結果をもとに、最も無理のない説明を組み立てていく。結合とは何か、安定とは何かを問い直すことは、物質の理解にとどまらず、見えないものを扱う際の基本的な態度を私たちに教えている。

イオン結合を「結びつき」としてではなく、「安定した状態」として捉え直すとき、私たちは物質の世界を別の角度から見ることができるようになる。そこでは、関係の美しさや対称性よりも、性質の差と結果としての落ち着きが重視される。結合とは、意志や選択の物語ではなく、条件が整ったときに現れる状態の一つなのである。

設問

問一

本文の説明によれば、イオン結合が成立する際の基本的な特徴として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 原子同士が電子を対等に共有し、双方が同時に安定する点にある。

イ 電子を失いやすい原子と受け取りやすい原子の性質の違いが、結合を生み出している点にある。

ウ 原子が互いに結びつこうとする意志をもつことで、結合が始まる点にある。

エ 結合によって原子の性質そのものが消失し、新たな物質に置き換わる点にある。

問二

本文におけるイオン結合と共有結合の対比についての説明として、最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア イオン結合は不安定な関係であり、共有結合の方が常に安定性が高いとされている。

イ 共有結合は役割の偏りを前提とし、イオン結合は対等な関係の特徴としている。

ウ イオン結合は電子の移動による役割の固定があり、共有結合は電子の共有による比較的对等な関係である。

エ 両者は成立の仕方は異なるが、安定という点では本文中で特に区別されていない。

問三 (100字程度)

本文では、イオン結合における「安定」とはどのような状態を指しているか。共有結合との違いにも触れながら説明せよ。

問四

本文において、「結合とは、関係の始まりではなく、状態の落ち着きとして捉えられている」とあるが、この表現の意図として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

ア 結合を人間関係の比喩として理解させるため。

イ 原子同士の結びつきを感情的なものとして説明するため。

ウ 結合を意志や目的ではなく、結果としての状態として捉え直すため。

エ イオン結合の方が共有結合より優れていることを示すため。

問五（100字程度）

本文全体を踏まえて、筆者がイオン結合を通して示そうとしている「結合」の捉え方の特徴をまとめよ。

問六（100字程度）

本文では、原子や電子が「見えない」ことがどのような意味をもつと考えられているか。科学的思考の在り方という観点から説明せよ。

解答・解説

【全体総括】

本章は、イオン結合と共有結合の違いを手がかりに、「結合」とは何か、「安定」とはどのような状態を指すのかを考えさせる論説文である。本文では、原子同士の結合が意志や目的によって生じるのではなく、それぞれの性質の違いと結果としての安定によって成立している点が繰り返し強調されている。特にイオン結合については、電子の移動による役割の固定と、電荷の引力によって保たれる状態が、結合の本質として示されている。

また、共有結合との対比を通して、結合の形は異なっても、いずれもエネルギー的に安定した状態に落ち着くことが重要であるという見方が示されている。筆者は、「結びつくこと」そのものよりも、「どのような条件のもとで安定が成立しているか」に目を向ける姿勢を重視している。さらに、原子や電子といった見えない対象を、物質の性質や反応といった結果から理解してきた科学的思考の在り方も示されており、本章は、物質の理解を超えて、見えないものを考える際の基本的な態度を問いつつ、直す内容となっている。

問一

正解…イ

解説

本文では、イオン結合が原子同士の「意志」や「協力」によって生じるのではなく、電子を失いやすい原子と受け取りやすい原子という性質の違いによって結果的に成立していることが述べられている。したがって、結合の基本的特徴を最も的確に表しているのはイである。

問二

正解…ウ

解説

本文では、イオン結合と共有結合の違いとして、電子の移動による役割の固定と、電子の共有による比較的对等な関係という点が対比されている。安定性そのものを否定したり、両者を同一視したりする記述はなく、本文の説明に合致するのはウである。

問三

模範解答

本文でいうイオン結合の安定とは、原子が意志をもって結びつくのではなく、電子の移動によって電荷の偏りが生じ、外部からの影響を受けにくい状態に落ち着くことを指す。共有結合では電子を共有する点で安定の仕方が異なる。

別解例①

イオン結合における安定とは、電子を失った原子と受け取った原子が電荷の引力によって結びつき、エネルギー的に低く変化しにくい状態になることである。共有結合では電子を共有することで、別の形で安定が保たれている。

別解例②

本文では、安定とは原子の判断や意図ではなく、電子配置が整い変化しにくくなる状態を指している。イオン結合は電子の移動による電荷の引力で安定し、共有結合は電子の共有によって安定する点で異なる。

自己採点チェックリスト

- ・ 「安定」を意志や目的ではなく状態として説明できているか
- ・ イオン結合と共有結合の違いに触れているか
- ・ 電子や電荷といった本文の要素を用いているか

問四

正解…ウ

解説

この表現は、結合を感情的・目的的なものとして捉える見方を退け、安定した状態が結果として現れているにすぎないという本文の主張を強調する役割をもつ。結合の捉え方を転換させる意図を最もよく表しているのはウである。

問五

模範解答

筆者は、イオン結合を通して、結合とは関係の始まりではなく安定した状態の成立であると示している。原子は意志をもって結びつくのではなく、性質の違いによって結果的に安定に至る。結合は条件の整い方によって生じるものだとして捉えられている。

別解例①

本文では、イオン結合を例に、結合が協力や選択の結果ではないことが示されている。電子の移動による役割の固定が、全体としての安定を生み出している点が重要であり、結合は関係性ではなく状態として理解されるべきだと筆者は述べている。

別解例②

筆者は、イオン結合を「安定」という観点から捉え直し、結合を意志や対等性の物語として扱わない姿勢を示している。性質の差によって生じる結果としての落ち着きが、結合の本質であるという見方が強調されている。

自己採点チェックリスト

- ・ 「結合Ⅱ安定した状態」という本文の中心の見方を捉えているか
- ・ イオン結合の特徴が抽象的にまとめられているか
- ・ 感想ではなく説明として書けているか

問六

模範解答

本文では、原子や電子が見えないからこそ、物質の性質や反応といった結果を手がかりに仕組みを推論する必要があるとされている。科学的思考とは、直接見えないものを、観測可能な事実から慎重に組み立てて理解する態度だと示されている。

別解例①

原子や電子は直接観察できないが、本文では物質の性質を通して結合を推測してきた点が見られている。見えないものを結果から考える姿勢こそが、科学的思考の基本であるという考えが述べられている。

別解例②

本文は、見えない原子や電子を想像で説明するのではなく、反応や性質という結果から結合を理解してきた過程を示している。科学的思考とは、見えない対象を事実に基づいて説明する態度であるとされている。

自己採点チェックリスト

- 「見えないこと」の意味が科学的思考と結びついているか
- 結果から仕組みを考える点が明確か
- 本文の具体内容に即して説明できているか

【第五問】縄文という時間——「進歩」の外側で生きるということ

縄文時代という言葉から、多くの人がまず思い浮かべるのは、土器や竪穴住居、狩猟や採集といった生活の断片であろう。学校教育の中では、それらはしばしば、農耕社会以前の「前段階」として整理される。そこには、やがて水田が広がり、金属器が使われ、国家が形成されていくという、一本の発展の道筋が暗黙のうちに想定されている。しかし近年の研究を踏まえると、縄文時代をそのような単線的な時間の中に収めること自体が、必ずしも妥当ではないことが見えてきている。

縄文時代は、日本列島において一万年以上にわたって続いたとされる。その長さは、後に続く弥生時代や古墳時代、さらには中世以降の歴史と比較しても際立っている。しかも、その間に生活の基本的な枠組みが大きく変化しなかった点は、しばしば注目されてきた。土器の形や装飾には地域差や変遷が見られるものの、狩猟・採集・漁労を組み合わせた生活様式が長期にわたって維持されていたことは、多くの遺跡の調査から示唆されている。

ここで重要なのは、縄文の人々が「変化しなかった」のか、それとも「変化を必要としなかった」のか、という問いである。たとえば、農耕を本格的に導入しなかった理由についても、単に技術が未発達だったからと説明することはできない。栽培植物の存在や、環境に対する高度な知識があったことは、すでに多くの研究が示している。にもかかわらず、大規模な農耕社会へと移行しなかったという事実、彼らが置かれていた自然環境や社会のあり方が、その生活を支えるのに十分であった可能性を示している。

この点で、縄文時代は「進歩」という言葉の意味を問い直す材料を提供してくれる。私たちはしばしば、技術の高度化や生産量の増大、人口の増加をもって進歩と呼ぶ。しかし、その基準自体が、特定の社会の価値観に基づいていることは見落とされがちである。もし、安定した生活を長期にわたって維持することを重視するならば、縄文社会はむしろ高度に調整された仕組みを持っていたと考えることもでき

る。

縄文土器の存在も、そのような見方を補強する。実用性と装飾性を併せ持つ土器は、単なる道具以上の意味を帯びていた可能性がある。食物の調理や保存という機能に加えて、共同体の中で共有される感覚や価値観が、形や文様として表現されていたのかもしれない。そこでは、「より速く」「より多く」という発想よりも、繰り返される営みを丁寧を重ねていく時間の感覚が支配的であったと推測される。

また、縄文社会における人と自然の関係も、現代の視点から再考されている。自然を一方向的に制御する対象としてではなく、関わり合いの中で利用していく姿勢は、遺跡から出土する多様な動植物の痕跡から読み取ることができる。そこには、環境の変化に応じて生活を微調整しながら、極端な負荷をかけない形で資源を利用する知恵があったと考えられている。

こうした縄文の特徴を踏まえると、私たちが当たり前のように用いてきた「時間」の物差しが、必ずしも普遍的ではないことが浮かび上がってくる。短期間での変化や成長を価値あるものとする見方は、近代以降に強く意識されるようになったものであり、それ以前の社会では、異なる時間感覚が存在していた可能性が高い。縄文時代の長さは、変化の遅さではなく、安定の持続として捉えることもできるのである。

もちろん、縄文社会が理想的であったと結論づけることはできない。生活の厳しさや、自然条件による制約が大きかったことも事実であろう。しかし、重要なのは優劣の判断ではなく、異なる社会が異なる基準のもとで成立していたという理解である。私たちが「発展」や「文明」という言葉を用いるとき、その背後にどのような価値観を前提としているのかを自覚することが、ここで求められている。

縄文という時代を振り返ることは、過去を懐かしむためではない。それは、現在の私たちが生きている時間の流れや、当たり前と考えている基準を相対化するため
の視点を与えてくれる。速さや効率だけでは測れない生のあり方が、かつて確かに存在していたという事実は、未来を考える上でも無視できない意味を持っている。

縄文は、歴史の一地点であると同時に、私たちの思考を外側へと開くための鏡でもあるのだ。

設問

問一

本文中で用いられている「単線的な時間」という表現について、その意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 歴史の進行を、技術や制度の発達が段階的に積み重なっていく過程として捉え、後の時代を常に前の時代よりも優れたものとみなす考え方。

イ 時間の経過を、自然環境の循環や季節の移り変わりに基づいて把握し、人間の活動をそのリズムの中に位置づける見方。

ウ 過去・現在・未来を同時に把握し、それぞれの時代が固有の価値を持つとする歴史観。

エ 歴史の出来事を偶然の積み重ねとして捉え、因果関係や方向性をできるだけ排して理解しようとする立場。

問二

本文に照らして、縄文時代が「農耕社会への前段階」としてのみ理解されることの問題点を述べたものとして、最も適切なものを選べ。

ア 縄文時代には農耕に必要な技術や知識が存在しなかったため、後の時代から見て未成熟な社会として位置づけざるを得ない点にある。

イ 農耕社会を歴史の到達点とみなす見方が、縄文社会が置かれていた自然環境や生活の安定性を評価の対象から外してしまう点にある。

ウ 縄文時代の生活様式が地域ごとに大きく異なっていたため、一つの社会として把握すること自体が困難である点にある。

エ 農耕社会への移行が結果的に人口増加をもたらしたことから、縄文社会の選択が歴史的に誤っていたと判断されやすい点にある。

問三

本文全体の論の進み方として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

ア 縄文時代の具体的事実を列挙した上で、それらを現代社会への教訓として直接的に結びつけている。

イ 一般に共有されている縄文時代のイメージを提示し、それを学術的事実によって否定した後、新たな歴史像を断定的に示している。

ウ 従来の評価基準を前提に縄文社会を説明しつつ、その基準自体を相対化することとで、別の見方の可能性を読者に示している。

エ 縄文社会と現代社会を対比し、現代社会の問題点を強調することを主眼として論を展開している。

問四

本文では、縄文時代の長期的な継続が「変化の遅さ」ではなく「安定の持続」として捉えられる可能性が示されている。その理由を、本文の内容に即して説明せよ。

(60～80字)

問五

筆者は、「進歩」や「文明」という言葉を用いる際に、どのような点に注意すべきだと述べているか。縄文社会への言及を踏まえてまとめよ。(70～90字)

問六

本文の終盤で述べられている、縄文時代を振り返ることの現代的意義について、「時間の物差し」という観点を含めて説明せよ。(70～90字)

解答・解説

【全体総括】

本文は、縄文時代そのものを評価することを目的とするのではなく、縄文時代をどのような基準で見てきたのかという視点を読者に問いかけている。とくに、技術の発達や社会の変化を「進歩」とみなす近代的な時間観が、歴史理解の前提として無自覚に用いられてきた点に注意を促している。

縄文時代の長期的な継続や生活の安定性を、変化の欠如としてではなく、別種の価値基準に基づく社会のあり方として捉え直す可能性が示される。こうした視点を通じて、筆者は、現代に生きる私たちが用いている「時間」や「発展」の物差しを相対化し、歴史を見るまなざしそのものを問い返そうとしている。

問一

正解…ア

解説

「単線的な時間」とは、歴史を一本の直線として捉え、後の時代を前の時代よりも必ず進んだものとみなす考え方を指す。本文では、縄文時代が農耕社会以前の段階として整理されがちな点を問題にしており、このような発展観を相対化しようとしている。

イは自然循環的時間観、ウは多元的歴史観、エは偶然性を強調する立場であり、本文の文脈とは合わない。

問二

正解…イ

解説

本文では、縄文時代を農耕社会への前段階とみなす見方が、当時の環境条件や生活の安定性といった要素を十分に評価していない点を問題としている。イは、この点

を的確にまとめている。

アは本文にない技術不足の断定、ウは論点のすり替え、エは本文が避けている価値判断を含む。

問三

正解…ウ

解説

本文は、従来の評価基準（進歩・発展）をいったん前提として示しつつ、その基準自体を問い直すことで、縄文社会を別の角度から捉える可能性を示している。断定や単純な対比ではなく、読者に再考を促す構成である点が特徴である。

問四

模範解答

縄文社会では、生活様式が環境に適応し安定していたため、急激な変化を必要とせず、その結果として長期間同様の枠組みが維持されたと考えられている。

別解例①

縄文時代は、自然環境と調和した生活が成り立っていたため、大きな制度的変化を求める必要がなく、安定した生活が長く続いたと本文は述べている。

別解例②

縄文の生活は、当時の環境条件のもとで十分に成立していたため、農耕社会への移行を急がず、結果として安定が長期にわたり保たれたと考えられる。

自己採点チェックリスト

- ・ 縄文社会の「安定」と「変化の少なさ」を因果関係で説明できているか
- ・ 環境条件や生活様式に触れているか
- ・ 本文の考えを自分の言葉でまとめているか

問五

模範解答

筆者は、進歩や文明という言葉が特定の価値基準に基づくものである点に注意を促し、縄文社会を評価する際にも、後の社会を基準とした優劣判断を避ける姿勢が必ずやと述べている。

別解例①

本文では、進歩や文明という概念が近代的な視点に支えられていることを指摘し、縄文社会をそれらの基準で一方的に評価することの問題点が示されている。

別解例②

筆者は、進歩や文明という言葉が普遍的な尺度ではないことを示し、縄文時代を後の社会との比較によって単純に位置づける見方を慎重に扱うべきだとしている。

自己採点チェックリスト

- ・ 「進歩」「文明」という言葉そのものへの注意点を述べているか
- ・ 縄文社会との関係が説明されているか
- ・ 評価の基準を問い直す視点が含まれているか

問六

模範解答

筆者は、縄文時代を振り返ること、短期的な変化を重視する現代の時間観を相対化し、安定の持続という別の時間の物差しが存在し得ることに気づく意義があると述べている。

別解例①

本文終盤では、縄文の長期的な安定に注目することで、速さや効率を基準とする現代的な時間観を見直し、異なる価値基準の可能性を考える意義が示されている。

別解例②

筆者は、縄文時代のあり方を通して、私たちが当然と考えている時間の尺度が唯一

ではないことを示し、現代社会の時間感覚を問い直す重要性を述べている。

自己採点チェックリスト

- 「時間の物差し」という観点が明確に含まれているか
- 縄文時代と現代との関係が整理されているか
- 本文全体の趣旨を踏まえたまとめになっているか

おわりに

今回もここまでお疲れ様でした！

もし澤日荘の現代文教材をすべて取り組んでくださっている方がいたら、けっこうな問題数に触れているのではないかと思います。この場で示している考え方や学習の仕方が唯一ではありませんから、国語という科目が面白くなってきたら、ぜひ他にもいろいろな問題に触れてみてくださいね。

澤日荘で公開している問題集の理想的な意図は、皆さんが自分なりに物事を見つけて、感じて、考える力そのものを高めてもらうことです。これは皆さん自身にしかできないことで、本来は得点で表したり評価したりできるものではありません。けれど、そうした根本的な力が育まれば、いわゆるテストの得点などに反映しないことのほうが少ないのも事実のようです。

現代文の問題集はいくつかストックができましたので、漢字練習の素材づくりにも着手しようと画策しています。完成したらサイトにアップしますので、活用してみてくださいね☆（ただしいつになるかは未定です笑）